

氏名	横堀 応彦
ヨミガナ	ヨコホリ マサヒコ
学位の種類	博士（学術）
学位記番号	博音第249号
学位授与年月日	平成26年3月25日
学位論文等題目	〈論文〉 創作プロセスとドラマトゥルギーの変容に関する研究－1990年代以降のドイツ語圏および日本における事例を中心に－

論文等審査委員

（主査）	東京藝術大学	准教授	（音楽学部）	市村 作知雄
（副査）	東京藝術大学	教授	（音楽学部）	熊倉 純子
（副査）	東京藝術大学	准教授	（音楽学部）	毛利 嘉孝
（副査）	東京藝術大学	教授	（音楽学部）	杉本 和寛
（副査）	慶應義塾大学	教授	（文学部）	平田 栄一朗
（副査）	東京藝術大学	非常勤講師		長島 確

（論文内容の要旨）

本研究論文は、1990年代以降の舞台芸術作品におけるドラマトゥルギーの変容を、その創作プロセスの変化を分析することを通して解き明かすことを目的としている。1990年代以降の舞台芸術作品におけるドラマトゥルギーの変容に関しては、これまで演劇理論的な記述は多く行われてきたが、この変容は創作環境の変化などに伴い、従来の演出家を中心とした父権的な創作プロセスの時代から、集団的な創作プロセスの時代へと変わりつつあることに大きな要因がある。これが本論文において筆者が取り扱う中心的なテーゼである。

舞台芸術作品のドラマトゥルギーの変容について考察するにあたり、実際の創作現場において作品のドラマトゥルギーを取り扱うドラマトゥルクという職能の変移について分析することは、大変有効な手段である。この職能について論じるためには、発祥の地であり、レッシング以来長い間積み重ねられた文化の残っているドイツ語圏の舞台芸術について考察することが必要不可欠であり、そのため本論文では日本のみならずドイツ語圏の舞台芸術についてもその考察対象とした。創作環境や創作プロセス、そしてドラマトゥルギーの変容に伴い、舞台芸術現場におけるドラマトゥルクの職能も変移している。これが本論文における筆者の副次的なテーゼである。

以上の問題意識に基づき、まず第1章ではマリアヌス・ファン・ケルクホーフェンによるニュー・ドラマトゥルギーや、ハンス＝ティース・レーマンによるポストドラマ演劇といった理論を参照しながら現在の舞台芸術作品におけるドラマトゥルギーの変容について考察することで、第2章以降での創作プロセスの議論への前提を築いた。

第2章および第3章ではドイツ語圏の舞台芸術における分析を行った。まず第2章ではドイツ語圏においてアーティストたちが公立劇場のみならずフリーシーンにおいても充実した創作活動を行えるようになった環境の変化に伴い、ドラマトゥルクという職能がどのように変移しているかについて考察した。またこれまで日本で取り上げる機会の少なかった、ドイツにおけるドラマトゥルク養成についても考察した。第3章では事例研究として、ニコラス・シュテーマンとシー・シー・ポップの事例を取り上げ、それらの事例から導き出すことの出来る創作プロセスとドラマトゥルギーの変容について論じた。

第4章および第5章では日本の舞台芸術における分析を行った。まず第4章では日本における創作プロセスの系譜を確認したあと、創作環境の変化と海外へと進出する日本演劇の状況について論じた。また日本においてドラマトゥルクという職能がどのように受容されてきたかについて、公立劇場における学芸部および文芸部の事例やフリーランスとして活動する長島確の事例をもとに論じた。第5章では事例研究として松井

周と劇団サンプルおよび松田正隆とマレビトの会の事例を取り上げ、それらの事例から導き出すことの出来る創作プロセスとドラマトゥルギーの変容について論じた。

以上の演劇理論やドイツ語圏および日本における事例研究を経た結果、現代の舞台芸術作品においてドラマトゥルギーとは、かつての「作劇法」や「演出コンセプト」のみを意味するものではなく、ある作品の「創作プロセス全体」を意味するように変容している、という結論が導かれた。またこのようなドラマトゥルギーの変容の背景には、ドイツ語圏・日本ともに創作環境が変化しており、集団的な創作プロセスによって作品あるいはプロジェクトを作り上げることが可能になりつつあることに起因していることを指摘した。

第6章ではドラマトゥルギーの変容とその背景にある社会的な変化との関連について論じた後、現代の舞台芸術現場においてドラマトゥルギーが持ちうる機能についてプロダクション・ドラマトゥルギーとキュレーション・ドラマトゥルギーという2つのドラマトゥルギーに分類して論じた。作品のクリエーションに関わるプロダクション・ドラマトゥルギーの仕事は、「アーティストのドラマトゥルク化」が進行するに伴い、従来に比べ他の俳優やスタッフたちによって担われる部分が増えており、それでもなおプロダクション・ドラマトゥルクが担当すべきは創作プロセスにおいて「外側の目」として参加し、鑑賞に際してのフレームを観客に向けて提供することであると指摘した。それに加え、フリーシーンの登場に伴い、よりマクロな視点から作品を捉えるキュレーション・ドラマトゥルギーという機能も必要とされていることを指摘した。

(総合審査結果の要旨)

本論文は、現在わが国の舞台芸術界が取り組むべき大きな課題であるドラマトゥルクについて論じた最初の博士論文となるもので、これ以降に多くなされることが予測されるドラマトゥルク研究にとって非常に大きな一歩となるものである。

ドイツの舞台芸術界が世界をリードする形ではじまったドラマトゥルクという専門領域を単なる一つの機能としてとらえるのではなく、より上位概念としてあるドラマトゥルギーの1990年代からの変遷を基礎にして、ドラマトゥルクという職能の変化をとらえ直した意欲的な論文に仕上がっている。集団的創作(コレクティブ)という概念を、ドラマトゥルギーの変化の根幹に据え、日本とドイツの先端的作品を具体的に論じ、分析するとともに、そこで果たしたドラマトゥルクの役割を評価するのがこの論文の大きな価値となっているとともに、付帯資料としてつけられた多大なインタビュードキュメントの存在が、その価値を一層高めていると考えられる。と同時に、ドラマトゥルクの役割の評価というのは、現在同時進行しているものに関してはかなり困難をともなう作業であり、人間関係の機微にも触れ、配慮しつつも、大胆に論じるという難しさは行間からにじみ出していると言えよう。とはいえ、ドラマトゥルクを日本の現場に定着させようという強い意志とそのために必要な強固な論理の構築という試みはかなりの程度成功していると判断される。それと同時に起きた創作手法の大きな変化を論理に組み込もうする意欲は十分に理解されるものの、その決定的成果はまだ少し遠くにあるということも付け加えておく必要があり、それは論者の次ぎなる発展を期待させるものとも言える。

総体としてみるならば、本論文は博士論文として十分なレベルに達しており、出版してその成果を広くとることが望まれる。